

中学1年生のディベート

ディベートにおける実態

小学校のときにディベートを経験している生徒は約半数でした。これには、ディベート的な活動も含まれます。ルールに基づく本格的なディベートとなるとほとんどの生徒が未経験だと言えます。

そこで、中学1年生の早い段階で、各小学校で学んできたことをもとにして、全員に標準型のディベートを経験させ、ディベートそのものを習得させたいと考えました。そうすれば、いつでも使うことができるようになります。話し合うことによって問題の所在が明らかになり、一つの方向が示されるという経験をするには、国語の学習に限らずその後の生徒の生き方にも影響してきます。

小学校でも中学校でも、子どもたちの話し合いは、活動としては設定されていたとしても、子どもたちにとって自覚的な学習活動になっているとは言い難い面があります。また、ときにはお互いの意見を出し合うだけの単なる言い合いで終わってしまうこともあります。これでは十分だとは言えません。

授業改善の方向性

そこで、以下の点から授業改善に取り組むこととしました。

- (1) 言語意識を具体的に取り上げ、生徒にとっての「実の場」を構成し、「活動あって学習なし」の状況を克服する。
- (2) 話したくなる場、話さざるを得ない状況を意図的に設定し、聞きたくなる状況、聞かざるを得ない場を工夫する。
- (3) 初めてのディベート学習では、生活経験に密着した二者択一型価値論題が取り組みやすい。政策論題による本格ディベートにも魅力はあるが、時間がかかりすぎる。二者択一型価値論題の場合、立論を立てる時間が少なくて済む。根拠資料を示す代わりに説得力のある具体例を示せばよい。
- (4) ディベート・マッチが行われる授業では、必ず一人一役の役割分担をすることが大切である。協働作業によって、楽しい授業が成立するのだという実感を味わわせたい。
- (5) 生徒相互の評価活動を取り入れることによって、様々な効果が期待できる。次の時間にディベート・マッチを行う生徒たちは、自分たちの参考にするために真剣に耳を傾けるようになる。
- (6) ディベート・マッチの前段階として、3人1組によるマイクロ・ディベートを取り入れる。これにより、短時間で全員がすべての役割を体験することができる。
- (7) 具体的なディベートの流れをつかみ、準備への意欲づけを図るために、台本を読む形で進めるモデル・ディベートを取り入れる。
- (8) ディベートの結果、広がり深まった考えをまとめる機会として、第二次意見文を作成させる。

生徒が切実に考えざるを得ないような論題を設定すれば、多様な意見や肯定・否定の意見のぶつかり合いが生まれ、本当の意味での意見交換会が行われます。常に、反対の側からの視点をもたせることが大切です。自分の意見を常に批判的に検討する目をもたせることで、より確かな意見に磨き上げられ、練り上げられていくことを実感することができます。